

「底が突き抜けた」時代の歩き方 284

「この素晴らしい世界」に鳴り響く軍靴

－ 映画『グッドモーニング・ベトナム』

《確か『グッドモーニング・ベトナム』(' 8 8 年) だったと思うけれど、ベトナム戦争を背景にした映画の空爆の場面に、皮肉たっぷりに平和的な『この素晴らしい世界』が流されていたのが印象的だった。

私は何となく『この素晴らしい世界』は昔からのスタンダード・ナンバーのように思い込んでいたのだけれど、実はこれ、1967年に作られた曲だったのね。今回ライナー・ノーツを読んで、やっと気がついた。

サッチモの一生を伝えるそのTV番組には、1967年、ベトナム戦争の中で米軍兵士を慰問に行ったサッチモが『この素晴らしい世界』を歌っている映像もあった。

そうか。そうだったのか。激しい空爆場面に『この素晴らしい世界』を流した裏にはそういうエピソードもあったのか。あの曲にはそういう時代色もこびりついていたのか。皮肉な効果を狙っただけではなかったのだ。

たぶん、当時を知るアメリカ人にとっては、『この素晴らしい世界』はただの平和的な曲ではなく、もっと複雑な感慨を呼び起こす曲なのだろう。》

コラムニストの中野翠が連載コラム(『サンデー毎日』01・11・11)の中で、そう書いている。中野翠は、サッチモがああ《ニュアンス豊かなダミ声》で歌いあげている『この素晴らしい世界』を聴いて、映画『グッドモーニング・ベトナム』を思い出しているが、私は逆に、その映画の中でサッチモの曲が流れているのを見出した。この87年の『グッドモーニング・ベトナム』は、サイゴンに派遣されてきた米軍放送の「実在人気D」の破天荒な行動を通して、泥沼化するベトナム戦争を見つめ直した問題作というところだが、サッチモの曲は確かに激しい空爆場面ばかりか、ベトナム人への激しい尋問・連行、ベトナム人の激しいデモと官憲の殴打、カメラマンへの暴行、戦場等々、要するに現実の「なんと素晴らしい世界」が映しだされる中を、ゆったりと別の世界のように流れていく。

《目には緑の木 赤いバラも

あなたと私のために咲く

ひとり思う なんとすばらしい世界

目には青い空 白い雲

恵みに満ちた昼の光 神秘の夜

この世は なんとすばらしい

空にかかる虹の色

行き交う人々の顔
友達どうしが元気かと握手
それは愛情のあかし
赤ん坊は泣き そして大きくなる
やがて私を超えていく
この世は なんとすばらしい
私はひとり思う
なんとすばらしい世界》

厳しい規律で個人の信条や自由を締め付ける軍隊組織の馬鹿馬鹿しさを嗤^{わら}っているD J(ロビン・ウィリアムズ)が、戦場へ送られていく兵士諸君のために、「偉大なるサッチモ」の曲としてプレゼントするのである。中野翠があとで気づいたように、けっして「皮肉たっぷり」にこの曲が流されるわけではないのだ。この曲が流されている現実の中でいくら大量に血が流されていようとも、『この素晴らしき世界』の曲がアメリカ軍にけっしてブラックジョークとして受けとめられていないところにこそ、恐るべき真のブラックジョークが漂っているのである。ベトナム戦争終結の12年後に撮られたこの映画は、映画『地獄の黙示録』のように、ワーグナーの"ワルキューレの騎行"のBGMを鳴り響かせてではなく、サッチモの『この素晴らしき世界』の感傷に包み込まれながら、ベトナムの戦場に赴いた兵士たちの姿を映しだしていたのだ。

映画の中に流れるこの曲を、いまでは誰でもアイロニーとしか受けとめられなくなっているが、では当時の米軍兵士たちはどのような気持でこの曲を聞いていたのだろうか。曲の中で歌われている「この素晴らしき世界」そのままに、おそらく聞き流していたのだ。その曲を聞きながら、一人のベトコンを探しだすためにベトナムの多くの村人たちの血を流すことはあっても、それはすべて коммуニストの毒に冒されようとしているベトナムを、「この素晴らしき世界」に変えようとする使命に支えられていたので、サッチモのこの曲ほど彼らの行為にふさわしいものはなかったのである。しかし、映画は米兵のD Jと友達になったベトナム人の青年(実はベトコン)の対決を通して、「この素晴らしき世界」の欺瞞が暴かれていく。

「爆弾の事は知ってる 道理でうまく逃げた 友達だった 信じてた」とD Jが叫ぶと、「あんたは愚かな側についた もう帰れ それがいい」という声が返ってくる。「おれが入れてやったバーを爆破しやがって おれの友情と信頼を裏切ったんだ 親友が実は敵だったとは」とD Jが怒りをぶちまける。すると青年が姿を現して、「敵? 敵とは何だ おれたちの国へ来て人を殺してるお前らこそ敵だ」と反論する。「君はおれを利用してバーで2人殺した」とD Jが言い返すと、青年は涙を浮かべて、「母は死んだ 兄もだ 生きてれば29だ 米兵に撃たれた 隣の人も死んだ 奥さんも なぜだ 人間だと思っただけだからだ 助けるんじゃなかった」と言い残して姿を消す。一人残されたD Jはこう呟く。「おれたちはこの国を救いに来たんだぞ ウソだろ サイゴンで5ヶ月 親友がベトコンだなんて 履歴書にも書けんぞ」

ベトコンの青年との関係を疑われたD Jは職を解かれ、サイゴンを去って行く。グッド

モーニング・ベトナム!の呼びかけでいつも始まっていた彼のテープが最後に流される。「グッバイ・ベトナム! そうなのだ 僕は帰りの切符をもらった クロナウアー最後の放送は国防総省の提供です 戦争好きな所 米国軍部だ 海外でもおかしな事をしてくれる 聞いたぞ あんたか 問題発言をしないようにお目付けだ 問題と言えばベトナムではマリワナ問題が 皆やってる 問題はない どうかレオか 元気でね 私服でドレスアップにはハイヒールをね ありがとう これを僕に? 魔法の靴よ はいてゝ わが家が一番」と そう言うと帰れる だといいいね 皆帰れると」

ところで、『この素晴らしき世界』が流れる中での空爆場面は、戦闘機やヘリコプターの低空飛行によって機銃掃射される従来型の古典的なもので、爆撃機から発射されたミサイルが標的に命中して、地上に噴煙があがる湾岸戦争以降の「空爆」と比較すると、同じ虐殺であっても、どこか懐かしい、牧歌的な感じがする。いかに残酷で生々しかろうとも、ベトナム戦争での空爆にはまだ人間が見えていたし、したがって、地上に駐留する戦争の仕方は現地人との交流を可能にし、無数の悲劇のなかにもいくつかの恋や感動をちりばめ、戦争そのものが相対化される契機を引き起こして、たとえば、この映画や『地獄の黙示録』のように多くの物語を生みだしていった。

映画『グッドモーニング・ベトナム』にも主人公のD Jと親友の青年の妹とのロマンスが挿入されている。D Jがベトナム人の彼女に一方的に惚れ込み、彼女のほうも他の米兵と異なって、気さくで人柄がよく、かつユーモアのあるD Jに好意を持つが、日常的に爆撃が行われる中ではロマンスも進展しようがない。D Jがサイゴンを離れるとき、彼女は「あなたはいい人 でもつきあえない 違いすぎる」といい、D Jは「言葉も違うしね」と優しく握手を求める。戦場では少なくとも、愛が国境を越えることはない。D Jがいくら「いい人」であっても、米軍内で流されるサッチモの『この素晴らしき世界』の欺瞞に気づいていようとも、彼はこの曲が流れるアメリカに暮らす人間であり、彼女はその曲の欺瞞をもるに被らざるをえないベトナム女性である。除隊してベトナムに住みつくとところまで踏み出せない彼には、無理な相談なのだ。

いうまでもないが、今回の同時中枢テロを見舞われたアメリカでは、このサッチモの曲が流されなかつただろうし、思い出されることもなかつただろう。「この素晴らしき世界」どころではなかつた筈だが、アフガン空爆はこの曲が流されても不思議ではない高揚感の中で行使されたような気がする。ベトナム戦争に対してそうであったように、アフガンに対してもタリバンの苛酷な支配から「この国を救いに来た」という思いを持ちつつ生きていたからだ。実際ベトナムまで出かけて戦争を仕掛けるのは、共産主義の侵略を食い止める「正義」のための闘いという名分がなければ、やってられる筈がなかつた。アフガン空爆では同時中枢テロに対する報復攻撃の意味あいが大きく伸しかかっていたものの、それだけではない。タリバン支配からアフガンの人々を救うために戦争を行っているとなえず自らにいい聞かせていたにちがいない。相手にどう受けとめられていようとも、相手を救うために自分たちは戦っているという思いに自らを駆り立てながら、アメリカは国益のためにどこにでも出かける論理の中にずっと住みつけていることを、この映画はいま映しだしてくれているのだ。

2002年2月23日記